校異源氏物語・もみちの賀

朱雀院の行幸は神な月の十日あまりなりよのつねならすおもしろかるへきたひの事なりけれは御かた　くものみたまはぬ事をくちおしかり給うへも藤つほのみ給はさらむをあかすおほさるれはしかくを御前にてせさせ給ふ源氏中将はせいかいはをそまひたまひけるかたてには大とのゝとふの中将かたちよういに人にはことなるをたちならひてはなを花のかたはらのみやま木なり入かたのひかけさやかにさしたるにかくのこゑまさりものゝおもしろきほとにおなしまひのあしふみおもゝちよにみえぬさまなりゑいなとし給へるはこれやほとけの御かれうひんかのこゑならむときこゆおもしろくあはれなるにみかとなみたをのこひ給ひかむたちめみこたちもみななきたまひぬゑいはてゝそてうちなをしたまへるにまちとりたるかくのにきはゝしきにかほのいろあひまさりてつねよりもひかるとみえ給春宮の女御かくめてたきにつけてもたたならすおほして神なとそらにめてつへきかたちかなうたてゆゝしとの給をわかき女房なとは心うしとみゝとゝめけり藤つほはおほけなき心のなからましかはましてめてたくみえましとおほすに夢の心ちなむし給ひける宮はやかて御とのゐなりけるけふのしかくはせいかいはに事みなつきぬないかゝみ給ひつるときこえ給へはあいなう御いらへきこえにくゝてことに侍つとはかりきこえたまふかたてもけしうはあらすこそみえつれまひのさまてつかひなむいゑのこはことなるこの世に名をえたるまひのをのこともゝけにいとかしこけれとこゝしうなまめいたるすちをえなむみせぬこゝろみの日かくつくしつれはもみちのかけやさう　くしくと思へとみせたてまつらんの心にてよふいせさせつるなときこえたまふつとめて中将の君いかに御らむしけむよにしらぬみたりこゝちなからこそ

　ものおもふにたちまふへくもあらぬみのそてうちふりし心しりきやあなかしことある御返めもあやなりし御さまかたちにみ給ひしのはれすやありけむ

　から人のそてふることはとをけれとたちゐにつけてあはれとはみき大かたにはとあるをかきりなふめつらしうかやうのかたさへたと　くしからす人のみかとまておもほしやれる御きさきことはのかねてもとほゝゑまれてち経のやうにひきひろけてみいたまへり行幸にはみこたちなとよにのこる人なくつかうま

つり給へり春宮もおはしますれいのかくのふねともこきめくりてもろこしこまとつくしたるまひともくさおほかりかくのこゑつゝみのをとよをひゝかすひとひの源氏の御ゆふかけゆゝしうおほされてみす経なと所　くにせさせ給ふをきく人もことはりとあはれかりきこゆるにとうくうの女御はあなかちなりとにくみきこえ給ふかいしろなと殿上人地下も心ことなりとよ人におもはれたるいうそくのかきりとゝのへさせ給へりさい将ふたり左衛門督右衛門督ひたりみきのかくのことをこなふまひの師ともなと世になへてならぬをとりつゝをの　くこもりゐてなむならひけるこたかきもみちのかけに四十人のかいしろいひしらすふきたてたるものゝねともにあひたるまつ風まことのみ山をろしときこえて吹まよひ色〳〵にちりかふこのはの中よりせいかひはのかゝやきいてたるさまいとおそろしきまてみゆかさしのもみちいたうちりすきてかほのにほひにけおされたる心ちすれはおまへなる菊を折て左大将さしかへ給日暮かゝるほとにけしきはかりうちしくれて空のけしきさへみしりかほなるにさるいみしきすかたに菊の色〳〵うつろひえならぬをかさしてけふはまたなきてをつくしたるいりあやのほとそゝろさむくこのよの事ともおほえすものみしるましきしも人なとのこのもといはかくれ山のこのはにうつもれたるさへすこしものゝ心しるはなみたおとしけり承香殿の御はらの四のみこまたわらはにて秋風楽まひ給へるなむさしつきのみものなりけるこれらにおもしろさのつきにけれはこと事にめもうつらすかへりてはことさましにやありけむ其夜源氏の中将正三位し給頭中将正下のかゝいし給かむたちめはみなさるへきかきりよろこひし給もこの君にひかれ給へるなれは人の目をもおとろかし心をもよろこはせ給むかしの世ゆかしけなり宮はそのころまかて給ぬれはれいのひまもやとうかゝひありき給をことにておほいとのにはさはかれ給ふいとゝかのわか草たつねとり給ひてしを二条院には人むかへ給ふなりと人のきこえけれはいとこゝろつきなしとおほいたりうち

　くのありさまはしり給はすさもおほさむはことはりなれと心うつくしくれいの人のやうにうらみの給はゝわれもうらなくうちかたりてなくさめきこえてんものをおもはすにのみとりない給心つきなさにさもあるましきすさひこともいてくるそかし人の御ありさまのかたほにその事のあかぬとおほゆるきすもなし人よりさきにみたてまつりそめてしかはあはれにやむことなくおもひきこゆるこゝろをも知給はぬほとこそあらめつゐにはおほしなをされなむとおたしくかる　くしからぬ御心のほともをのつからとたのまるゝかたはことなりけりおさなき人はみついたまふまゝにいとよき心さまかたちにてなに心もなくむつれま

とはしきこえ給しはしとのゝうちの人にもたれとしらせしとおほしてなをはなれたるたいに御しつらひになくしてわれもあけ暮いりおはしてよろつの御事ともをゝしへきこえ給いてほんかきてならはせなとしつゝたゝほかなりける御むすめをむかへ給へらむやうにそおほしたるまむ所けいしなとをはしめことにわかちてこゝろもとなからすつかうまつらせ給ふこれみつよりほかの人はおほつかなくのみおもひきこえたりかのちゝみやもえしりきこえ給はさりけりひめ君はなをとき　く思ひいてきこえ給ときあま君をこひきこえ給おりおほかりきみのおはするほとはまきらはし給をよるなとは時　くこそとまりたまへこゝかしこの御いとまなくてくるれはいて給をしたひきこえ給おりなとあるをいとらうたくおもひきこえ給へり二三日うちにさふらひおほとのにもおはするおりはいといたくくしなとしたまへは心くるしうてはゝなきこもたらむ心ちしてありきもしつ心なくおほえ給そうつはかくなむときゝ給てあやしきものからうれしとなむおもほしけるかの御法事なとし給ふにもいかめしうとふらひきこえ給へり藤つほのまかてたまへる三条の宮に御あり様もゆかしうてまいり給へれは命婦中納言君中務なとやうの人〳〵たいめしたりけさやかにももてなし給かなとやすからすおもへとしつめておほかたの御物かたりきこえ給ふほとに兵部卿宮まいり給へりこの君おはすときゝ給てたいめし給へりいとよしあるさまして色めかしうなよひたまへるを女にてみむはおかしかりぬへく人しれすみたてまつり給にもかた　くむつましくおほえ給てこまやかに御物かたりなときこえ給宮も此御さまのつねよりもことになつかしううちとけ給へるをいとめてたしとみたてまつりたまひてむこになとはおほしよらて女にてみはやといろめきたる御心にはおもほすくれぬれはみすの内に入給をうらやましくむかしはうへの御もてなしにいとけちかく人つてならてものをもきこえたまひしをこよなううとみ給へるもつらうおほゆるそわりなきやしは　くもさふらふへけれとことそと侍らぬほとはをのつからおこたり侍をさるへき事なとはおほせ事も侍らむこそうれしくなとすく　くしうていて給ひぬ命婦もたはかりきこえむかたなく宮の御けしきもありしよりはいとゝうきふしにおほしをきて心とけぬ御けしきもはつかしくいとをしけれはなにのしるしもなくて過行はかなのちきりやとおほしみたるゝ事かたみにつきせす少納言はおほえすおかしきよをみるかなこれもこあまうへのこの御事をおほして御をこないにもいのりきこえ給しほとけの御しるしにやとおほゆおほいとのいとやむ事なくておはしますこゝかしこあまたかゝつらひたまふをそまことにおとなひ給はむほとはむつかしき事もやとおほえけるさ

れとかくとりわき給へる御おほえの程はいとたのもしけなりかし御ふくはゝかたは三月こそはとてつこもりにはぬかせたてまつり給ふをまたおやもなくておひいて給しかはまはゆき色にはあらてくれなゐむらさき山ふきのちのかきりをれる御こうちきなとをきたまへるさまいみしういまめかしくおかしけなりおとこ君はてうはいにまいり給とてさしのそき給へりけふよりはおとなしくなり給へりやとてうちゑみ給へるいとめてたうあひ行つき給へりいつしかひゐなをしすゑてそゝきゐたまへる三尺のみつしひとよろひにしな　くしつらひすへて又ちひさきやともつくりあつめてたてまつり給へるを所せきまてあそひひろけたまへりなやらふとていぬきかこれをこほち侍にけれはつくろひ侍そとていと大事とおほいたりけにいと心なき人のしわさにも侍なるかないまつくろはせ侍らむけふはことといみしてなゝひたまひそとていて給けしき所せきを人ゝはしにいてゝみたてまつれはひめ君もたちいてゝみたてまつり給てひゝなの中の源しの君つくろひたてゝうちにまいらせなとし給ことしたにすこしおとなひさせ給へとおにあまりぬる人はひゝなあそひはいみ侍ものをかく御おとこなとまうけたてまつり給てはあるへかしうしめやかにてこそみえたてまつらせ給はめ御くしまいるほとをたにものうくせさせ給なと少納言きこゆ御あそひにのみ心いれ給へれははつかしとおもはせたてまつらむとていへは心のうちに我はさはおとこまうけてけりこの人ゝのおととことてあるはみにくゝこそあれわれはかくおかしけにわかき人をもゝたりけるかなと今そおもほししりけるさはいへと御としの数そふしるしなめりかしかくおさなき御けはひのことにふれてしるけるはとのゝうちの人ゝもあやしと思ひけれといとかうよつかぬ御そひふしならむとはおもはさりけりうちより大殿にまかてたまへれはれひのうるはしうよそほしき御さまにて心うつくしき御けしきもなくくるしけれはことしよりたにすこしよつきてあらため給御心みえはいかにうれしからむなときこえたまへとわさと人すゑてかしつき給ときき給しよりはやむ事なくおほしさためたる事にこそはとこゝろのみをかれていとゝうとくはつかしくおほさるへししひてみしらぬやうにもてなしてみたれたる御けはひにはえしも心つよからす御いらへなとうちきこえ給へるはなを人よりはいとことなりよとせはかりかこのかみにおはすれはうちすくしはつかしけにさかりにとゝのほりてみえ給なに事かはこの人のあかぬ所はものし給わか心のあまりけしからぬすさひにかくうらみられたてまつるそかしとおほししらるおなし大臣ときこゆるなかにもおほえやむ事なくおはするか宮はらにひとりいつきかしつき給御心をこりいとこよなくてすこしもをろか

なるをはめさましとおもひきこえ給へるをおとこ君はなとかいとさしもとならはい給御心のへたてともなるへしおとゝもかくたのもしけなき御心をつらしとおもひきこえ給なからみたてまつり給時はうらみもわすれてかしつきいとなみきこえ給ふつとめていて給ふ所にさしのそき給て御さうそくし給ふになたかき御をひ御てつからもたせてわたり給て御そのうしろひきつくろひなと御くつをとらぬはかりにし給いとあはれなりこれはないえむなといふ事も侍なるをさやうのおりにこそなときこえ給へはそれはまされるも侍りこれはたゝめなれぬさまなれはなむとてしひてさゝせたてまつり給けによろつにかしつきたてゝみたてまつり給ふにいけるかひありたまさかにてもかゝらん人をいたしいれてみんにますことあらしとみえ給さむさしにとてもあまた所もありき給はす内春宮一院はかりさては藤つほの三条の宮にそまいり給へるけふはまたことにもみえたまふかなねひ給まゝにゆゝしきまてなりまさり給ふ御有さまかなと人〻めてきこゆるを宮き丁のひまよりほのみ給ふにつけてもおもほす事しけかりけりこの御事のしはすもすきにしか心もとなきにこの月はさりともと宮人もまちきこえ内にもさる御心まうけともありつれなくてたちぬ御ものゝけにやとよ人もきこえさはくを宮いとわひしうこの事によりみのいたつらになりぬへき事とおほしなけくに御心ちもいとくるしくてなやみ給中将の君はいとゝおもひあはせてみすほうなとさとはなくて所　くにせさせたまふ世の中のさためなきにつけてもかくはかなくてややみなむととりあつめてなけき給ふに二月十よ日のほとにおとこみこむまれ給ひぬれはなこりなくうちにも宮人もよろこひきこえ給いのちなかくもとおもほすは心うけれとこうきてんなとのうけはしけにのたまふときゝしをむなしくきゝなし給はましは人はらはれにやとおほしつよりてなむやう

くすこしつゝさはやい給けるうへのいつしかとゆかしけにおほしめしたる事かきりなしかの人しれぬ御心にもいみしう心もとなくて人まにまいり給てうへのおほつかなかりきこえさせ給をまつみたてまつりてくはしくそうし侍らむときこえ給へとむつかしけなるほとなれはとてみせたてまつり給はぬもことはりなりさるはいとあさましうめつらかなるまてうつしとり給へるさまたかふへくもあらす宮の御心のおにゝいとくるしく人のみたてまつるもあやしかりつるほとのあやまりをまさに人のおもひとかめしやさらぬはかなき事をたにきすをもとむる世にいかなる名のつゐにもりいつへきにかとおほしつつくるに身のみそいと心うき命婦の君にたまさかにあひ給ていみしき事ともをつくし給へとなにのかひあるへきにもあらすわか宮の御事をわりなくおほつかなかりきこえ給へ

はなとかうしもあなかちにのたまはすらむ今をのつからみたてまつらせ給ひて
むときこえなからおもへるけしきかたみにたゝならすかたはらいたき事なれは
まほにもえのたまはていかならむよに人つてならてきこえさせむとてない給さ
まそ心くるしき
　いかさまにむかしむすへるちきりにてこのよにかかる中のへたてそかゝる
事こそこゝろへかたけれとの給命婦も宮のおもほしたるさまなとをみたてまつ
るにえはしたなふもさしはなちきこえす
　みてもおもふみぬはたいかになけくらむこやよの人のまとふてふやみあは
れに心ゆるひなき御事ともかなとしのひてきこえけりかくのみいひやるかたな
くてかへり給ものから人のものいひもはつらはしきをわりなき事にのたまはせ
おほして命婦をもむかしおほひたりしやうにもうちとけむつひ給はす人めたつ
ましくなたらかにもてなし給ものから心つきなしとおほすときも有へきをいと
はひしく思ひのほかになる心ちすへし四月にうちへまいり給ふほとよりはおほ
きにおよすけ給てやう　くおきかへりなとし給あさましきまてまきれところな
き御かほつきをおほしよらぬ事にしあれはまたならひなきとちはけにかよひ給
へるにこそはとおもほしけりいみしうおもほしかしつく事かきりなし源しの君
をかきりなきものにおほしめしなからよの人のゆるしきこゆましかりしにより
てはうにもすゑたてまつらすなりにしをあかすくちおしうたゝ人にてかたしけ
なき御ありさまかたちにねひもておはするを御らむするまゝに心くるしくおほ
しめすをかうやむ事なき御はらにおなしひかりにてさしいて給へれはきすなき
たまとおほしかしつくに宮はいかなるにつけてもむねのひまなくやすからすも
のをおもほすれいの中将の君こなたにて御あそひなとし給にいたきいてたてま
つらせ給てみこたちあまたあれとそこをのみなむかゝる程よりあけ暮みしされ
はおもひわたさるゝにやあらむいとよくこそおほえたれいとちいさきほとはみ
なかくのみあるわさにやあらむとていみしくうつくしと思ひきこえさせ給へり
中将の君おもての色かはる心ちしておそろしうもかたしけなくもうれしくもあ
はれにもかた　くうつろふ心ちしてなみたおちぬへし物かたりなとしてうちゑ
み給へるかいとゆゝしううつくしきに我身なからこれににたらむはいみしうい
たはしうおほえ給そあなかちなるや宮はわりなくかたはらいたきにあせもなか
れてそおはしける中将は中　くなる心ちのみたるやうなれはまかて給ぬわか御
かたにふし給てむねのやる方なきほとすくして大いとのへとおほすおまへのせ
むさいのなにとなくあをみわたれる中にとこ夏の花やかにさきいてたるをおら

せ給て命婦の君のもとにかき給事おほかるへし

よそへつゝみるに心はなくさまて露けさまさるなてしこの花はなにさかなんとおもひたまへしもかひなきよに侍りけれはとありさりぬへきひまにやありけむ御らむせさせてたゝちりはかりこの花ひらにときこゆるをわか御心にもものいとあはれにおほししらるゝほとにて

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも猶うとまれぬやまとなてしことはかりほのかにかきさしたるやうなるをよろこひなからたてまつれるれいの事なれはしるしあらしかしとくつをれてなかめふし給へるにむねうちさはきていみしくうれしきにもなみたおちぬつく　くとふしたるにもやるかたなき心ちすれはれいのなくさめにはにしのたいにそわたり給ふしとけなくうちふくたみ給へるひむくきあされたるうちきすかたにてふえをなつかしうふきすさひつゝのそきたまへれは女君ありつる花の露にぬれたる心ちしてそひふし給へるさまうつくしうらうたけなりあい行こほるゝやうにておはしなからとくもわたり給はぬなまうらめしかりけれはれいならすそむき給へるなるへしはしのかたについゐてこちやとの給へとおとろかすいりぬるいそのとくちすさみて口をゝいしたまへるさまいみしうされてうつくしあなにくかゝる事くちなれ給にけりなみるめにあくはまさなき事そよとて人めして御こととりよせてひかせたてまつり給さうのことはなかのほそをのたへかたきこそ所せけれとてひやうてふにをしくたしてしらへ給かきあはせはかりひきてさしやり給へれはえゐしはてすいとうつくしうひき給ふちひさき御ほとにさしやりてゆし給御てつきいとうつくしけれはらうたしとおほしてふえふきならしつゝおしへ給いとさとくてかたきてうしともをたゝひとわたりにならひとり給大かたらう　くしうおかしき御心はへを思し事かなふとおほすほそろくせりといふものはなはにくけれとおもしろふふきすさひ給へるにかきあはせまたわかけれとはうしたかはす上手めきたりおほとなふらまいりてゐともなと御らむするにいて給へしとありつれは人〻こはつくりきこえてあめふり侍ぬへしなといふにひめ君れいの心ほそくてくし給へりゐもみさしてうつふしておはすれはいとらうたくて御くしのいとめてたくこほれかゝりたるをかきなてゝほかなるほとは恋しくやあるとのたまへはうなつき給われもひとひもみたてまつらぬはいとくるしうこそあれとおさなくおはするほとは心やすくおもひきこえてまつくね　くしくうらむる人の心やふらしと思てむつはしけれはしはしかくもありくそおとなしくみなしてはほかへもさらにいくまし人のうらみおはしなとおもふもよになかふありておもふさまにみえたてまつ

らんと思ふそなとこま　くとかたらひきこえ給へはさすかにはつかしうてともかくもいらへきこえ給はすやかて御ひさによりかゝりてねいり給ぬれはいと心くるしうてこよひはいてすなりぬとの給へはみなたちておものなとこなたにまいらせたりひめ君おこしたてまつり給ひていてすなりぬときこえ給へはなくさみておき給へりもろともにものなとまいるいとはかなけにすさひてさらはね給ねかしとあやうけに思給つれはかゝるをみすてゝはいみしきみちなりともおもむきかたくおほえ給かやうにとゝめられ給おり　くなともおほかるをゝのつからもりきく人おほいとのにきこえけれはたれならむいとめさましき事にもあるかな今まてその人とももきこえすさやうにまつはしたはふれなとすらんはあてやかに心にくき人にはあらし内わたりなとにてはかなくみ給けむひとをもものめかし給て人やとかめむとかくし給なゝり心なけにいはけてきこゆるはなとさふらふ人ゝもきこえあへりうちにもかゝる人ありときこしめしていとおしくおとゝの思ひなけかるなるなとのたまはすれとかしこまりたるさまにて御いらへもきこえ給はねは心ゆかぬなめりといとおしくおほしめすさるはすき　くしううちみたれてこのみゆる女ほうにまれ又こなたかなたのひと　くなとなへてならすなともみえきこえさめるをいかなるものゝくまにかくれありきてかく人にもうらみらるらむとのたまはすみかとの御としねひさせ給ぬれとかうやうのかたえすくさせ給はすうねへ女くら人なとをもかたち心あるをはことにもてはやしおほしめしたれはよしあるみやつかへ人おほかる比なりはかなき事をもいゝふれ給ふにはもてはなるゝ事も有かたきにめなるゝにやあらむけにそあやしうすい給はさめると心みにたはふれ事をきこえかゝりなとするおりあれとなさけなからぬほとにうちいらへてまことにはみたれ給はぬをまめやかにさう　くしと思きこゆる人もありとしいたう老たる内侍のすけ人もやむことなく心はせありあてにおほえたかくはありなからいみしうあためいたる心さまにてそなたにはをもからぬあるをかうさたすくるまてなとさしもみたるらむといふかしくおほえ給けれはたはふれ事いひふれて心みたまふににけなくも思はさりけるあさましとおほしなからさすかにかゝるもおかしふて物なとの給てけれと人のもりきかむもふるめかしきほとなれはつれなくもてなし給へるを女はいとつらしとおもへりうへの御けつりくしにさふらひけるをはてにけれはうへはみうちきのひとめしていてさせ給ぬるほとに又人もなくてこの内侍つねよりもきよけにやうたいかしらつきなまめきてそうそくありさまいと花やかにこのましけにみゆるをさもふりかたうもと心つきなくみたまふ物からいかゝおもふらんとさすかにす

くしかたくてものすそをひきおとろかし給へれはかはほりのえならすゑかきたるをさしかくしてみかへりたるまみいたうみのへたれとまかはらいたくくろみおちいりていみしうはつれそゝけたりにつかはしからぬあふきのさまかなとみ給てわかもたまへるにさしかへてみ給へはあかきかみのうつるはかり色ふかきにこたかきもりのかたをぬりかくしたりかたつかたにてはいとさたすきたれとよしなからすもりの下草おひぬれはなとかきすさひたるをことしもあれうたての心はへやとゑまれなからもりこそなつのとみゆめるとてなにくれとの給ふもにけなく人やみつけんとくるしきを女はさもおもひたらす

きみしこはたなれのこまにかりかはむさかりすきたる下葉なりともといふさまこよなく色めきたり

さゝわけは人やとかめむいつとなくこまなつくめるもりのこかくれわつらはしさにとてたち給ふをひかへてまたかゝるものをこそ思侍らね今さらなるみのはちになむとてなくさまいといみし今きこえむ思ひなからそやとてひきはなちていて給をせめてをよひてはしはしらとうらみかくるをうへはみうちきはてゝみさうしよりのそかせ給けりにつかはしからぬあはひかなといとおかしうおほされてすき心なしとつねにもてなやむめるをさはいへとすくさゝりけるはとてわらはせ給へはないしはなまゝはゆけれとにくからぬ人ゆへはぬれきぬをたにきまほしかるたくひもあなれはにやいたうもあらかひきこえさせす人ゝもおもひのほかなる事かなとあつかふめるを頭中将きゝつけていたらぬくまなき心にてまたおもひよらさりけるよと思ふにつきせぬこのみ心もみまほしうなりにけれはかたらひつきにけりこの君も人よりはいとことなるをかのつれなき人の御なくさめにとおもひつれとみまほしきはかきりありけるをとやうたてのこのみやいたうしのふれは源しの君はえしり給はすみつけきこえてはまつうらみきこゆるをよはひのほといとおしけれはなくさめむとおほせとかなはぬ物うさにいとひさしくなりにけるをゆふたちしてなこりすゝしきよひのまきれに温明殿のわたりをたゝすみありき給へはこのないしひはをいとおかしうひきゐたり御前なとにてもおとこかたの御あそひにましりなとしてことにまさる人なき上手なれはものうらめしうおほえけるおりからいとあはれにきこゆうりつくりになりやしなましとこゑはいとおかしうてうたふそすこし心つきなきかくしうにありけむむかしの人もかくやおかしかりけむとみゝとまりてきゝ給ふひきやみていといたう思ひみたれたるけはひなりきみあつまやをしのひやかにうたひてより給へるにをしひらいてきませとうちそへたるもれいにたかひたる心ちそする

たちぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝるあまそゝきかなとうち
なけくをわれひとりしもきゝおふましけれとうとましやなに事をかくまてはと
おほゆ

人つまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれしとそおもふとて
うちすきなまほしけれとあまりはしたなくやと思ひかへして人にしたかへはす
こしはやりかなるたはふれことなといひかはして是もめつらしき心ちそし給頭
中将は此君のいたうまめたちすくしてつねにもとき給かねたきをつれなくてう
ち くしのひ給かた くおほかめるをいかてみあらはさむとのみ思ひわたるに
これをみつけたる心ちいとうれしかゝるおりにすこしをとしきこえて御心まと
はしてこりぬやといはむとおもひてたゆめきこゆ風ひやゝかにうちふきてやゝ
ふけ行ほとにすこしまとろむにやとみゆるけしきなれはやをらいりくるに君は
とけてしもね給はぬ心なれはふときゝつけて此中将とは思よらすなをわすれか
たくすなるすりのかみにこそあらめとおほすにおとな くしき人にかくにけな
きふるまひをしてみつけられん事ははつかしけれはあなわつらはしいてなむよ
くものふるまいはしるかりつらむものを心うくすかし給けるよとてなをしはか
りをとりて屏風のうしろにいり給ひぬ中将おかしきをねむしてひきたてまつる
屏風のもとによりてこほ くとたゝみよせておとろ くしくさはかすに内侍は
ねひたれといたくよしはみなよひたる人のさき くもかやうにて心うこかすお
り くありけれはならひていみしく心あはたゝしきにも此君をいかにしきこえ
ぬるかとわひしさにふるふ くつとひかへたりたれとしられていてなはやとお
ほせとしとけなきすかたにてかうふりなとうちゆかめてはしらむうしろておも
ふにいとおこなるへしとおほしやすらふ中将いかて我としられきこえしとおも
ひて物もいはすたゝいみしういかれるけしきにもてなしてたちをひきぬけは女
あかきみ くとむかひて手をするにほと くわらひぬへしこのましうわかやき
てもてなしたるうはへこそさりもありけれ五十七八の人のうちとけてものいひ
さはけるけはひえならぬ二十のわか人たちの御中にてものをちしたるいと月な
しかふあらぬさまにもてひかめておそろしけなるけしきをみすれと中 くしる
くみつけ給て我としりてことさらにするなりけりとおこになりぬその人なめり
とみ給にいとおかしけれはたちぬきたるかひなをとらへていといたうつみ給へ
れはねたきものからえたへてわらひぬまことはうつし心かとよたはふれにくし
やいてこのなおしきむとの給へとつととらへてさらにゆるしきこえすさらはも
ろともにこそとて中将のおひをひきときてぬかせ給へはぬかしとすまふをとか

くひきしろふほとにほころひはほろ　くとたえぬ中将

つゝむめるなやもりいてんひきかはしかくほころふるなかのころもにうへにとりきはしるからんといふ君

かくれなき物としる　くなつころもきたるをうすき心とそみるといひかはしてうらやみなきしとけなすかたにひきなされてみないて給ひぬ君はいとくちおしくみつけられぬる事と思ひふし給へり内侍はあさましくおほえけれはおちとまれる御さしぬきおひなとつとめてたてまつれり

うらみてもいふかひそなき立かさねひきてかへりしなみのなこりにそこもあらはにとありおもなのさまやとみたまふもにくけれとわりなしとおもへりしもさすかにて

あらたちし浪に心はさはかねとよせけむいそをいかゝうらみぬとのみなむありけるおひは中将のなりけりわか御なをしよりは色ふかしとみ給にはた袖もなかりけりあやしの事ともやおりたちてみたるゝ人はむへおこかましき事はおほからむといとと御心おさめられ給ふ中将とのゐ所よりこれまつとちつけさせ給へとてをしつゝみてをこせたるをいかてとりつらむと心やましこのおひをえさらましかはとおほすその色のかみにつゝみて

なかたえはかことやおふとあやふさにはなたのおひをとりてたにみすとてやり給たちかへり

君にかくひきとられぬるおひなれはかくてたえぬるなかとかこたむえのかれさせ給はしとありひたけてをの　く殿上にまいり給へりいとしつかにものとをきさましておはするに頭のきみもいとおかしけれとおほやけ事おほくそうしくたすひにていとうるはしくすくよかなるをみるもかたみにほゝえまる人まにさしよりてものかくしはこりぬらむかしとていとねたけなるしりめなりなとてかさしもあらむたちなからかへりけむ人こそいとおしけれまことはうしや世中よといひあはせてとこのやまなるとかたみにくちかたむさてそのゝちともすれはことのついてことにいひむかふるくさはひなるをいとゝものむつかしき人ゆへとおほししるへし女はなをいとえむにうらみかくるをわひしと思ありき給中将はいもうとの君にもきこえいてすたゝさるへきおりのをとしくさにせむとそ思ひけるやむことなき御はら　くのみこたちたにうへの御もてなしのこよなきにわつらはしかりていとことにさりきこえ給へるをこの中将はさらにをしけたれきこえしとはかなき事につけてもおもひいとみきこえ給ふこの君ひとりそひめ君の御ひとつはらなりけるみかとの御こといふはかりこそあれ我もおなし大

臣ときこゆれと御おほえことなるかみこはらにてまたなくかしつかれたるはなにはかりおとるへききはとおほえたまはぬなるへし人からもあるへきかきりととのひてなに事もあらまほしくたらいてそものし給けるこの御中とものいとみこそあやしかりしかされとうるさくてなむ七月にそきさきゐ給めりし源しの君宰相になり給ぬみかとおりゐさせ給はむの御心つかひちかふなりてこのわか宮を坊にと思ひきこえさせ給に御うしろみし給へき人おはせす御はゝかたのみなみこたちにて源しのおほやけ事しり給すちならねははゝ宮をたにうこきなきさまにしをきたてまつりてつよりにとおほすになむありけるこうきてむいとゝ御心うこき給ことはり也されと東宮の御よいとちかふなりぬれはうたかひなき御くらゐなりおもほしのとめよとそきこえさせ給けるけに東宮の御母にて廿よ年になり給へる女御をゝきたてまつりてはひきこしたてまつり給かたき事なりかしとれいのやすからす世人もきこえけりまいり給夜の御ともに宰相の君もつかふまつりたまふおなし宮ときこゆる中にもきさいはらのみこたまひかりかゝやきてたくひなき御おほえにさへものし給へは人もいとことに思かしつききこえたりましてわりなき御心には御こしのうちもおもひやられていとゝをよひなき心ちしたまふにすゝろはしきまてなむ

つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲井に人をみるにつけてもとのみひとりこたれつゝものいとあはれなりみこはおよすけ給月日にしたかひていとみたてまつりわきかたけなるを宮いとくるしとおほせと思ひよる人なきなめりかしけにいかさまにつくりかへてかはおとらぬ御ありさまはよにいてものし給はまし月日のひかりの空にかよひたるやうにそ世人もおもへる